Meiji Gakuin Alumni Association News

明治学院同窓会News

2016 APRIL

DO FOR OTHERS 第17号より抜粋

明治学院同窓会
Meiji Gakuin Alumni Association

祝チャペル献堂100周年記念

明治学院礼拝堂のできるまで（前編）

教養教育センター客員教授
中島　耕二
（1970年・法学部卒）

（上）1931年第11回卒業アルバムに掲載されたチャペル（右）現在のチャペル

今年は、1916（大正5）年3月27日に明治学院礼拝堂の献堂式が行われて、100年目の節目の年にあたります。礼拝堂は一世紀にわたり明治学院の歴史を見つめて来た生き証人ですが、その生い立ちや見て来た過去を尋ねても黙して語ることはありません。

そこで、本日は礼拝堂に代わって私から、その誕生までの経緯を皆様にお話しようと思います。

話は1887（明治20）年9月に溯りますが、築地居留地と麹町にあった東京一致英和学校と英和予備校の生徒280人が明治学院普通学部生徒として白金の新キャンパスに移ってきました。校舎は現在礼拝堂のある場所に建てられた「サンダム館」でした。この校舎はアメリカのオランダ改革教会信徒のサンダム夫人から、亡夫の記念として7，000円の寄付を受け、その資金によって建てられたものです。石材の基礎の上にケヤキの柱、ヒノキで床や壁が張られ、一部3階建ての立派な建物でした。2階の北側に400人を収容する講堂があり、礼拝のほか学院の各種行事の中心集会場として使用されました。

しかし、学院関係者には白金に移転当初から独立した礼拝堂を持ちた

いという思いがありました。1888（明治21）年6月、東京一致神学校で教鞭をとったこともあるE・ローゼィ・ミラー宣教師が盛岡伝道に赴任することになり、築地居留地29番に自宅として構えていた大邸宅を、将来明治学院の礼拝堂建設のためにと地上権と合わせて、学院理事会に寄付の申し出をしてくれました。1903（明治36）年2月、学院はこの邸宅の売却代金1万5千円をもって、新たに礼拝堂の建設に着手しました。設計はドイツ人技師ヒャルト・ゼールに依頼し、現在の正門を入って右手の記念館前の芝生の位置に年末までに、尖塔のあるドイツ風石造りの瀟洒な礼拝堂が完成しました。ファサードの円形の大窓にはドイツから取り寄せたステンドグラスが用いられ、奥ゆかしい光のもとで毎日の礼拝が行われ、学院関係者、学生および生徒の喜びは一入でした。大金を寄付したミラー宣教師は建物に自分の名前を冠せられることを辞退しましたが、学院では感謝の意を込めて「ミラー記念礼拝堂」と名付けました。

⬇次号に続く

（右）チャペル竣工（1916年）直後のチャペル内部
（左）現在のチャペル内部（クリスマス）

卒業生の声

「私のチャペルの思い出」
～パイプオルガンの響き～

現在のパイプオルガン以前の「鳥が羽ばたくデザインのパイプオルガン（ドイツ・バルカー社製）」は、私が卒業する直前の今から50年前の1966年2月に奉献されました。しかし残念なことにパイプオルガンとしては43年という短いオルガン人生を終えて、現在のパイプオルガンにバトンタッチしたのです。オルガンは、武藤富男学院長、G.J. ヴァンワイク、齋藤茂夫、園部不二夫教授のご努力で実現されたものです。当時、私は聖歌隊として奉献式にも参加しましたが、更に50年前の私達の卒業式において初めてチャペルにパイプオルガンが鳴り響いたことを今も鮮明に記憶しています。そして、この鳥が羽ばたくデザインは、G.J. ヴァンワイク教授の発案でなされたものであり、教授は、私達学生に、「明治学院生として大きく羽ばたくことを期待している」とのメッセージを贈ってくださいました。私には社会人としてのスタートの時であったので、意味ある言葉であったと同時に、忘れることの出来ないパイプオルガンなのです。なお、このオルガンはチャペルの向かいの記念館2階にミニチュアとして保存されています。　内山 功（1966年商学科卒）

チャペルに思うこと

私が入学した頃の入学式・卒業式はチャペルで行われていたように記憶しています。その式の中で当時の高橋源治学長の「神と人とに愛される者となってほしい」の言葉と共に、暗い中にも何か厳粛な雰囲気を持つチャペルの印象が強く残っています。

残念ながら、チャペルアワーには何度か出席はしましたが、思い出となるようなものはありません。

明治学院の教育理念は、キリスト教教育にあることは言うまでもありません。そのバックボーンとも言える神学部は現在残っておりませんが、チャペルは建築物でありながら、学院の理念や理想といった全てを内包しているよう思えます。その思いは卒50年以上たった今、より強いものとなっています。学院の象徴でもあるチャペルは、そこで学んだ者として、心の故郷でもあると思います。

岩城嗣郎（1964年英文学科卒）

「ひとり三役」
―クララ・ヘップバーンの日本における働き―

経済学部教授
大西　晴樹

J.C. ヘボンご夫妻（横浜開港資料館所蔵）

はじめに　創立150周年を迎えて初めて、ヘボン博士の妻クララの名前に由来する建物が明治学院大学横浜キャンパスに完成しました。学生たちが憩いの場として利用するクララ・ラウンジです。これは、1863（文久3）年に創設されたヘボン塾、すなわち、「ミセス・ヘボンの学校」（Mrs. Hepburn's school）に淵源する明治学院にとって、夫人の名前が次第に認知されてきたことの証拠ではないでしょうか。

主婦「グッド・ヘルプミート」として

1859（安政6）年の開港後、宣教師の草分けである宣教医師ヘボンの妻として来日したクララの気持ちは恐怖と不安で一杯だったと思います。14歳の一人息子サムエルを教育のためにアメリカの知人に預けてきたことを後悔し、来日2年目には、宿舎である成仏寺に夫や他の宣教師と一緒に帰宅途中、女性である彼女だけが、何者かによって背後から棍棒で肩を殴打されたのです。夫であるヘボンは、クララの気持ちを察して、息子の様子を見ることを理由に彼女を一時帰国させました。妻を労わりながらも日本宣教のパイオニアとして、辞典の編集、聖書の翻訳、無償医療奉仕に明け暮れるヘボンと、その夫を支え続けたクララの「よき助け手」（good helpmate、意訳すれば「内助の功」）の役割は、クララの働きを特徴づける言葉となりました。

半世紀以上も前に出版された高谷道男先生の『ヘボン書簡集』（岩波書店）には、アメリカ長老教会海外伝道局へのクララの書簡は掲載されませんでした。高谷ゼミ出身の岡部一興氏の編集で、近年刊行された『ヘボン書簡全集』（教文館）には、クララの書簡が掲載されており、彼女の「内助の功」が心憎いまでに綴られています。「聖人君子」として金銭感覚に疎いヘボン博士に代わって、ヘボン家の利害を訴えるのは彼女の役割でした。たとえば、アメリカ・オランダ改革教会のブラウン師が為替レートや子息の教育で有利な待遇を受けていることに対して、彼女はこう訴えています。「ブラウン氏は給料を、100ドルにつき311枚の割合で1分銀で受け取っておられます。わたしどもは給料をドルで受け取っており、それは100ドルにつき1分銀220枚か30枚にしかなりません。…サムは多分次の秋にはプリンストンに入学すると思いますが、彼を教育するためにどなたかに援助をお願しようとは思っておりません。…彼［ブラウン―引用者挿入］

の息子は大学に行っているのですが、オランダ改革派教会の教育会の援助を受けています」。

また最初の宣教師の妻として、日本の玄関口横浜の外国人社会に社交の場を提供し、多忙なヘボンに代わって客人の世話をしたのもクララの役割でした。文献に登場するだけでも、家族の到着を心待ちにするブラウン師、横浜で病気療養中の在華宣教師ネヴィアス夫妻、マッカーティ在華宣教医師、新潟に赴任する前のエディンバラ医療宣教会のパーム宣教医師、香港聖公会監督バートン夫妻、朝鮮半島に赴任する前のアンダーウッド宣教師、『勝海舟の嫁「クララの明治日記」』（中公文庫）を書いた同じ名前のクララ・ホイットニー、日光金谷ホテルの前身である小さなコテージインを世界的に有名にしたイギリス人女性探検家イザベラ・バード等々の客人がヘボン邸に宿泊し、彼女の世話になったのでした。

キリスト教教育の教師として　アメリカで学校教師をしていたクララが奉行所の委託事業ではなく、横浜居留地39番に家塾を開いて生徒を引き受けて教えたのは1863（文久3）年の秋の事です。最初の生徒は、順天堂の創始者佐藤泰然の末子林董でした。その後、ヘボン夫妻の一時帰国などを挟みながらクララの家塾は、バラ学校、築地大学校、東京一致英和学校、そして明治学院へと大河のごとく成長していくのです。1864年1月のヘボンの書簡では、「妻は毎朝2時間、3人の少年に教えています」と記され、同年11月のクララの書簡でも「わたしの小さな学校はとても盛んです」と報告されています。

当時の「横浜ヘボン塾」の様子（横浜開港資料館所蔵）

クララの教育方針は何かというと、書簡を読むかぎり、キリスト教による人格教育と生徒によき教育を施すことにあったことが分ります。1859（明治2）年の書簡では、専門的な教師の派遣をこのように訴えています。「わたしの少女たちのクラスは向上しています。そして彼女たちがキリスト者の女性になることを望んでおります。彼女たちは、英語と日本語でマタイ伝5章の一部と、主の祈りと、多くの讃美歌を学んでおります。ご存じのとおり、わたしは良い歌い手ではありませんし、この冬ひどく患いました気管支炎によって使い物になりませんし、彼女たちが正式な教師に上手に歌を習うことが出来たら上手になるのにと思っています」。キリシタン禁制の高札が撤去され、ヘボン塾が軌道に乗ってきた1875（明治8）年の書簡では、「わたしにとって日本における仕事の最も重要なやり方の一つは、これから育つ世代に世俗的な教育と同様に、良きキリスト教教育を与えることなのです。当地の上流階級の人たちよりもむしろ、中流や下層階級の人たちに、より大きな期待を持っています。彼らは向上することと、教育の影響を受けて、心が清められることを必要としています」述べて、キリスト教教育に賭ける希望を表明しています。ただし、主婦として、教師として多忙なクララは、以下のような一線は画していました。「わたしは教えておりますので、研究するための頭は残っておりません。わたしは夫や家の世話をして、両方をすることが出来ないことを知っております」。

そういうクララは、神経痛とリュ

ーマチを患っており、左側の足と腕にしびれがありました。30名それ以上の生徒の世話は耐えかねるという夫の助言もあり、1875年に還暦を前にして、同じく元学校教師のジョン・バラに学校の責任者の仕事を渡しました。引退後は、横浜山手の居留地245番に転居し、神経痛にひどく苦しみながらも、その一線を越えて時間をみつけては執筆や翻訳の仕事もしました。

サムエルの母親として　22歳で結婚して以来、クララは6度妊娠し、5人の男の子を授かりましたが、唯一成人したのはアモイで生まれたサムエルだけでした。最初は、東洋伝道に向かう小さな捕鯨船の中で流産。長男はシンガポールで生後直後に死亡。ニューヨークの開業医時代に生まれた三男、四男、五男は流行病でいずれも幼少期に死んでしまいました。そのため、ヘボンもクララも一人息子サムエルに期待したのです。ヘボンとクララの書簡を読むと、辞典の編集、聖書の翻訳、無償医療奉仕、そして学校については、2人とも考え方はそう変わらないのですが、一人息子サムエルに対してだけは、2人の見方に隔たりがあるように思えるのです。

サムエルは、ヘボンが期待したような、信仰が篤く、成績優秀な少年ではありませんでした。高校時代に「嘘」をついたことを理由に後見人から鞭打ちされたとの情報が届くと、ヘボンは、何者かに殴打されたクララに一時帰国の便宜をはかり、課題を共有しようとします。クララの再来日後、こんどはサムエルが折角入学したプリンストン大学を退学したというではありませんか。実弟に宛てた手紙でヘボンはこのように嘆いています。「わたしの心を悩ますものはあの子が宗教ぎらいの点です。あの子のことはいつもわたしどもの気がかりです。…サムは何か悪い習慣に陥って、たとえば飲酒とか、ギャンブルなどで大学から退学を命じられたのではないかと心配しています。あの子は勉強がきらいでしたから、改心しないでそのままであれば勉学の方面では期待できません」。そして、ヘボンはアメリカで就職を望みましたが、1865（慶応元）年、21歳の時、サムエルは日本で就職し、米国商館に臨時雇いの職を得ました。そのときも、ヘボンは、聖書のルカによる福音書15章の「放蕩息子」たとえに出てくる父親のように息子の帰還を喜ぶのではなく、クリスチャンでないことに「がっかりしました」と述べ、サムエルに対して冷淡でした。その後、サムエルは結婚し、妻をアメリカから迎え、近所に住んだときにも、アメリカに住みたいのならその方がいいだろうという具合です。

それに対して、母親のクララは、サムエルに信仰を求める点ではヘボンと一致していても、息子に対する受け止め方は大きく異なっていました。「あの子がここ［日本―引用者挿入］に来てくれたことは、わたくしどもにとって、とても大きな慰めとなりました。息子は物静かな子で、それでいてなかなかしっかりしており、それに親切でやさしい子でございます。…ただあの子が本当のキリスト者になってくれれば、わたくしどもの幸福の盃はあふれるのでございますが。あの子は適当な職業を得て、仕事に励んでいます」。結婚に際しても「サムはわたしどもの家から歩いて15分ほどの所に、感じのよい小さな家を建てています。彼と妻は6週間のうちに落ち着くことにしています。彼は商店の発送係として良い職についています」。このように、一人息子に対する温度差は歴然としていました。これは、父親と母親の相異というよりも、信仰を持てない女性や子どもに対するヘボンの家父長主義的な態度を示しているように思われてなりません。サムエルは日本においてビジネスマンとして成長し、日本郵船横浜支店長やスタンダード石油長崎支店長を長らく務めました。しかし、父親は「宗教と学問」にしか関心が無いと述べて、ヘボンとの溝を終生埋めることをしませんでした。

おわりに　対照的にクララは、夫の「留守中心細いが、サムエルが自分を気遣ってくれる」と述べています。クララの息子に対する愛は、ヘボン塾という家塾においてもいかんなく発揮されたのでないでしょうか。初期の塾生である林董（後の外務大臣）、高橋是清（後の大蔵大臣、総理大臣）、益田孝（三井物産、日本経済新聞の創業者）は、クララに教わったことのみならず、「本当に母親のようなやさしさで、いろいろお世話になった」（林董）とその愛の深さを言及しています。そこに、「ひとり三役」を履行した女性クララの限りない魅力があるのだと思います。今回私は、滞日期間のクララの働きを述べてみました。クララの生涯を含めて、より詳しくは、NHKのラジオ講座「歴史再発見」のテキスト、拙著『ヘボンさんと日本の開化』（NHK出版、2014年）を参考にしていただければ幸いです。

活躍する同窓生紹介

「さむらいKANAZAWA」を世界に

（1975年・商学科卒）武田幸男

明治学院大学を1975年に卒業後、外資系製薬会社ファイザーに35年間勤務し、現在は金沢市にある北陸大学で教授として教職をとっております。また、大学と地域との結び付きを図る地域連携センター長をしております。

金沢市は私にとって全く縁もゆかりも無い土地です。企業を辞めて現在の道に進んだのは、2つの理由があります。

一つは、大学教育に関心をもったことです。

東京で経済同友会に所属していた時に、経済同友会では教育問題をテーマとして取り上げていました。墨田区にある中学校を訪問した時に、教育現場の先生方は一生懸命に子供達を教育しておりました。中学校ではなく大学教育に問題があるのか？そのことを知るには、大学の「教育現場に入ってみるのが一番」と考え、企業を辞めて大学で教えることにしました。

二つ目は、中国への関心です。

15年以上も前のことですが、「10年後の世界戦略を考える会議」に日本代表として参加した時のことです。当時は日本企業の殆どが米国に目を向けていました。日頃から日本のマスコミ報道に接していた私は、中国が急成長することに対して懐疑的でした。ところが、発表されるデータは今後の中国の発展を予測させるものばかりで、中国に強い関心をもちました。同時に将来の中国を担う若者はどのような人なのかに関心が湧き、多くの中国人留学生を受け入れている北陸大学に興味をもちました。

現在、私のゼミには中国からのゼミ生が多数おり、毎年のように東京大学、京都大学、一橋大学、早稲田大学などの大学院に進学しております。明治学院大学への進学者がいない点は少し残念に思っております。

私は現在、大学教育の他に行政と一緒になって地域創生戦略を考えたり、企業での社員教育、金沢の武士文化の発展などに関与しています。特にオリンピックに向けて金沢の「武士文化」を世界に広めようと活動している「さむらいKANAZAWA」は、学生や市民と一緒になって行動しており、ビジネスの世界では味わえなかった感動を楽しんでおります。

学生・市民と共に金沢の武士文化を広める活動中
（テレビ取材時の写真）

プロフィール

武田幸男（たけだ・さちお）

栃木県宇都宮市出身。1951年生。1975年本学経済学部商学科卒業後、台糖ファイザー（株）（現：ファイザー株式会社）入社。慶應義塾大学大学院、ハーバード大学ビジネススクール修了。2007年ファイザー株式会社取締役 Vice President of HR & CA（人事・経営企画）、2010年より北陸大学教授。現在は北陸大学地域連携センター長、フォアビジョン株式会社代表取締役社長。また加賀市ロボット研究会委員長、加賀市戦略会議委員会委員長、金沢市産学連携事業運営委員もつとめる。

株式会社明治学院サービスは、
学校法人明治学院の100%出資会社です。
学校の周辺業務を事業化し効率的効果的な
各種サービスの提供を行い、
その収益を教育事業に還元することを
目的としています。

【主な業務内容】

◆人材派遣ビジネス
明治学院（明治学院大学、高等学校、中学校等）及び教育機関や他学校を中心に学校事務に特化した人材派遣を行っています。学校関連企業として相応しい質の高いサービスの提供に努めています。

◆明治学院白金チャペルでの結婚式
当事者のいずれかが、同窓生、現・元教職員、法人役員またはそれらの近親者の方であればお申し込みいただけます。本学はプロテスタントのキリスト教信仰を建学の精神としており、礼拝に準じる儀式としての挙式を行います。

◆学生総合保険・海外旅行傷害保険・火災保険・自動車保険（バイクを含む）・医療保険などの代理店業務を行っています。

◆白金校舎パレットゾーンの食堂・横浜校舎のインターナショナルカフェの運営管理をしています。

◆新入生．在校生に対するお部屋探し・住替えのご相談受付、明治学院大学女子寮「セベンレンス館」の運営管理をしています。

◆大学ロゴグッズ、バッハアカデミーのCD、自動販売機での飲料の販売をしています。

MG SERVICE 株式会社 明治学院サービス
〒108-0071東京都港区白金台1-2-37
Tel 03-5421-1555　Fax 03-5421-1556
URL: http://meijigakuin-s.co.jp/

【お問合せ先】
明治学院同窓会事務局　〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37　TEL 03-5421-5190（FAX 03-3441-0970）（事務取扱い時間　9:00 ～16:00）
http://meigaku-dosokai.jp